特集
大分
豊の国　地域社会の未来像

Special Features
OITA
Local Communities in Future in the Country of Affluence

夢
Dream

「ゼロから夢の実現に向けて」大分トリニータ

溝畑　宏　MIZOHATA Hiroshi　株式会社大分フットボールクラブ/代表取締役

大分トリニータは、1994年4月、日本の100分の1の人口の地方都市「122万人都市」大分県において産声を上げた。その設立にあたっては、①母体となるクラブがない、②親会社となる大企業がない、③芝生のグラウンドがない等、まさにゼロからのスタートであった。

大分県は、地域の国際化を推進するため、1992年に2002年FIFAワールドカップサッカーの開催地として立候補した。立候補にあたっては、スタジアムなど国際的なスポーツイベントを開催する為のソフトとハードの整備が必要であった。特に会場となるビッグアイは、劇場感覚を取り入れた大規模イベントにも対応可能（4万人以上収容・可動席）であり、多目的に利用可能な簡易開閉式屋根を持つ全天候型施設を兼ね備えた施設である。大分トリニータは、この施設の2002年以降のスタジアム利活用の有効施策として、また何よりも地方分権推進の礎になる地域住民の「自信」「元気」「誇り」を喚起するスポーツ文化として、まさに県民、企業、行政が三位一体となって設立された。

■写真1ー大分スポパーク21　ビッグアイ

■写真2ー選手およびスタッフー同

■写真3ー試合前の練習風景

■写真4ー選手入場をカラーボードで迎えるサポーター

1——設立理念

大分トリニータ（当時大分トリニティ）は設立時に下記のような活動理念を掲げた。

①スポーツを通じた地域貢献・スポーツの普及
②世界に通用するクラブづくり
③夢は必ずかなう、そして夢への挑戦

また設立時に下記のような目標を掲げた。

①10年以内にJ1リーグ昇格
②観客動員数30000人達成

2——J1昇格までの道のり

文字通りゼロからのスタートであったため理想と現実はかなりのギャップがあった。①最初の試合の観客数はわずか3人、②運営は大半がボランティア、③選手は大半がアマチュアで練習は夕方6時以降、④練習場は野球場のマウンドを削って使用など、その時は厳しい環境ではあったが、設立10年以内に①J1昇格、②観客3万人達成を目標にまさに「着眼大局　着手小局」の精神で、地道な努力を重ねた。

資金的にも大口スポンサーはなく、一口5万円のスポンサーのため、1日に40から50社を訪問するなどして、1994年の県リーグ時代から1999年のJ2に加盟するまでに約500社のスポンサーから支援を頂いた。それでもその間、大口スポンサー撤退、チームの成績不振など幾度となく経営危機に追い込まれたが、乗り越えてきた。

1999年にJ2に参入し、4度目のチャレンジの末、2002

■写真5ー試合前の集合写真

■写真6－2002年念願のJ1昇格　J2優勝を決める

年FIFAワールドカップが開催された年に、ゼロからスタートして僅か8年という短い期間でJ1昇格を決めた。この年は、まさに大分県にとってスポーツ文化の浸透した年であった。その翌年の2003年は最終戦までJ1残留に向けての戦いが続いた。平均2万人を越えるサポーターがホームゲームに訪れるようになり、設立時の目標であった3万人の観客を3試合実現することができた。

そして、今や大分トリニータは、地域密着の理想のクラブとして、試合が行われる日には、世代や性別を超えて多くの家族連れが青いユニホームを着て応援するなど老若問わず多くの県民の皆様に愛され、楽しまれている。また、大分県を全国・世界へPRし、特に青少年に夢を与えるなど、まさに大分県民の「宝」になりつつある。

3――今後の展望

親会社が存在しないJ1クラブは、大分と新潟だけであり、その経営基盤は他のJクラブと比較するとかなり厳しい現状にある。しかし、大分トリニータの活躍は、大分県はもちろん多くの地方都市へ「自信」「元気」「誇り」を与えるシンボルとなっている。

大分の例に刺激されて、九州の熊本、長崎、宮崎、鹿児島、沖縄、そして四国の愛媛など各地で地域密着型クラブを街づくりの一環として、将来のJリーグ参入を目指した活動が始まっている。

我々クラブも、初心を忘れず、今まで以上に地域密着を心がけ、世界を目指し、夢を追いかけるクラブとして、新たに2008年までに下記の目標を達成するべく邁進しています。

①J1リーグ優勝　アジアチャンピオンシップ出場
②観客動員数平均30000人達成
③総収入額26億円、入場料収入12億円達成

■写真7－ビッグアイで応援するサポーター

■写真8－ゴール！ゴール！ゴール！

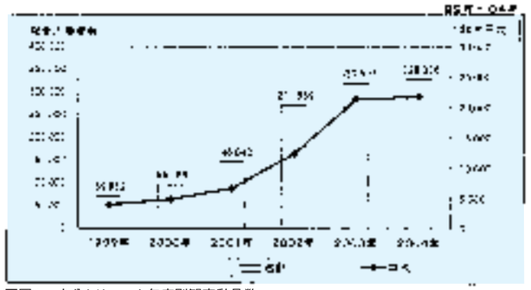
このような夢が実現されることが、地方都市が自立自助の精神で地域に密着しながら手づくりで世界的なレベルのソフトを創出する、まさに地方分権に相応しいモデルケースになるものと、信じているところである。

大分トリニータは、ゼロからスタートした大分県の「地域づくり」や「人づくり」のシンボルとなっており、まさに地方分権の象徴、そして身の丈論打破の象徴として、県民のよりどころになっている。これからも県民、企業、行政が三位一体となって夢への挑戦を続けて行く。

全国の皆様、ぜひこの夢へのチャレンジの舞台である「ビッグアイ」へ来て下さい。

〈写真提供〉OITA F.C.

■写真9－1996年1月史上最短でJFC昇格を決める



■図1－大分トリニータ年度別観客動員数